

米国、中国等のAI開発の現状、 今後、日本に必要なAIとの関わり方



株式会社風雅 AI 代表取締役

吉川 直樹 Naoki Yoshikawa

座長
福井 聖

本年に入り、「AI」という言葉を耳にしない日はないほど、生成 AI をめぐる話題は社会のあらゆる場面へと急速に浸透してきた。しかし、言葉としての普及とは裏腹に、実際の活用や社会実装の面では大きな隔りがある。米国や中国、とりわけ近隣のアジア諸国と比較したとき、日本の AI 活用は依然として大きく後れを取っているのが実情である。

本講演では、この「格差」を具体的に可視化する二つの視点を手がかりとしたい。一つは、最先端技術の世界最大規模の見本市として 2026 年 1 月に米国ラスベガスで開催された CES(Consumer Electronics Show) である。もう一つは、中国最大規模の AI イベントとして 2026 年 7 月に上海で開催された WAIC(世界人工知能大会) である。西と東、それぞれ AI 開発をリードする二つの拠点で示された技術と構想を対比することで、日本が現在置かれている位置と、埋めるべき差の輪郭が明確に浮かび上がってくる。

加えて、教育業界と密接に関わる立場から、海外と日本における AI 教育の現状の違いについても警鐘を鳴らしたい。AI をどのように学び、次世代へどのように手渡していくのか、この教育設計の思想における差は、数年後の国際競争力へと直結していく。

そのうえで、今後の日本に求められる「AI との関わり方」を、大きく三つの観点から論じる。第一に、AI を単なる道具として消費するのではなく、その仕組み(メカニズム)を理解したうえで使いこなすための学習のあり方である。第二に、AI と人間がそれぞれの強みを活かして協働するための、健全な役割分担(ワークバランス)の設計である。第三に、AI 活用の土台となるデータを、いかに収集・整備・準備していくかという視点である。

AI は一過性の流行ではなく、社会と産業の基盤を静かに、しかし確実に組み替えつつある。世界の潮流を正しく捉えたうえで、日本が自らの強みを活かしてどのように AI と向き合っていくべきか、本講演が、聴講される皆様一人ひとりにとって、それぞれの現場で AI との関わり方を考える契機となれば幸いである。

略歴

2005 年から SEO、チャットボット等の研究開発に携わり、AI に関しても早期に着手。20 年以上にわたる DX を含めた講師・コンサルティングの実績を礎に、企業や教育機関、行政、議員団など多岐にわたる組織に対し、AI 導入支援と戦略設計を推進。愛知県内の教育機関においても AI 教育の普及に尽力している。研修や講演では、単なる AI スキルの伝達にとどまらず、LLM(大規模言語モデル)の論理的メカニズムを平易に解説。その上で、「実践的な技術」として業務効率化に直結するカリキュラムを体系的に提供している。クリエイティブ制作領域にも深く精通し、アートと AI が融合して切り拓く新たな可能性についても高い知見を持つ。

また、シリコンバレーをはじめとする米国のテクノロジー企業との連携を通じて国際的な知見を深め、グローバル水準の AI リテラシーを国内へ還元することで、日本の生産性向上に寄与することを使命としている。